

B' 210mm



中古住宅購入で後から設置
炉台・炉壁はご主人の手作り

娘の楓ちゃんも暖かい薪ストーブがお気に入り



シベリア鉄道でわざわざ運び込んだストーブ



樽の中の薪で二時間程度の量



memo

薪ストーブ愛好家にとって、薪の管理は重大な仕事。購入すると7~10キロの一束が500円前後と決して安くはない。今回取材した方々はそれぞれ知り合いに貰うか自分自身で薪を手に入れていた。燃料用の薪は最低1年間は乾燥させる必要があるため、薪置き場も必須。コミュニティと自然、場所…都会ではなかなかできない田舎ならではの贅沢なのかも。

待ち焦がれた冬の訪れ。
自然豊かなフィオーレに似合う
薪ストーブライフ
Special Feature

5丁目 友田さん | 薪ストーブ暦4年
①以前住んでいた住宅に薪ストーブがあり、使ってみて虜に
②奥が深い。薪材ひとつでも燃え方もにおも違う
③ストーブ周辺のアクセサリを毎年少しずつ増やしている
④薪ストーブ好きが高じて林業に目覚め資格も取った。今は林業振興組合に所属し、自分で薪を伐採しに行くのが喜び

5丁目 木村さん | 薪ストーブ暦20年
①現在のフィンランドログハウスを建てた時、家に合わせて
②庭の剪定後の木や不要になった家具の廃材等も燃やせる所
③お客さんが来るときや雨の日に使用する。視覚的にも楽しめるので好評
④知り合いの植木屋さんからもらったり、自分の家の庭木から

4丁目 原さん | 薪ストーブ暦17年
①山が好きなお二人共“寒い栃木=薪ストーブ”と意見が一致
②炉の中で焼き芋を焼いたり、熾火をいろいろに移して火種を増やしたりできる。火を消しても温かさが残っているのもいい
③薪をくべながらポーッと炎を眺めるのが癒やされる
④山の所有者と仲良くなる(主に明るくて社交的な奥様の仕事)

- ①薪ストーブを使うキッカケ
- ②薪ストーブの魅力
- ③我が家の楽しみ方
- ④薪の調達方法

火のある暮らし
text by Chiaki Okawara



2丁目 小林 満
Kobayashi Mitsuru

山 小屋風のお宅には、存在感のある薪ストーブが鎮座する。ゆらゆらと揺らめく炎は、見ているだけでじんわりと温かい気持ちになる。

高校時代は山岳部に所属し、成人してから山登りをライフワークとしていた小林満さん。長いときは一ヶ月以上も山に籠もるため、東京でまとまったお金を稼いで登山に明け暮れていた。

「大勢の仲間やザイルパートナーを組んで登ることもあったけど、一人で登ることも多かった。過酷な登山生活で火を囲んでいる時は唯一の安心できる時間。周りから木々を集めて焚き火して、火を見ながらとりとめのないことを考えて過ごす。味わった人にしかわからない魅力だと思っただけ、至福の時というか…非常に満たされた時間だった」

「火を使うことで人間らしさを取り戻せる気がする。料理をしたり温まるだけでなく、心強い気持ちになれる。扱いや勝手がわかるようになるのに10年はかかったなあ。手間がかかるからこそ楽しい」

薪ストーブで肉を焼くこともあるが、火と肉の間隔や火加減などは「感覚」で行う。火を使うことで五感研ぎ澄まされる。そんな火に欠かせないのが薪だが、今は薪目線で木の性質に興味を持つ。

「密度や堅さ、高い所に生えているだとかそんなことで燃えやすさや持続性がわかる。焚き付けにはダケカンバ、長く燃えるナツツバキが気に入っている。斧で薪割りも結構楽しいよ。フィオーレは薪ストーブ使っている人が多いけど、高齢者や、忙しい人でも使えるように独自の薪供給システムみたいなものがあればいいな」

訪れた際も火を囲んでの取材だった。火の周りには自然と人が集まり、満ち足りた語らいの場になる。小林さんがいつもより饒舌だったのも、火の持つ力のせいなのかもしれない。